

サマラの陶器 4

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Sarre, Friedrich メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/1585

サマラの陶器(4)

Die Keramik Von Samarra Die Ausgrabungen Von Samarra Band II

Friedrich Sarre
フリードリヒ・サーレ

佐々木 達夫, 大瀧 敏夫, 波頭 桂 訳

序 言

無釉陶器

- I. 無装飾、あるいは僅かな装飾の無釉陶器
 - A. ロクロ製小型把手付水差
 - B. 大型の厚手の壺、水甕
 - C. 様々な形状の容器
- II. 押印意匠のある無釉陶器
 - A. 装飾的意匠あるいは文字を伴う円形押印
 - B. 具象的なデザインの円形または四角形の押印
 - C. 連続文、または帯状装飾
 - D. 型押し文様を伴う小型の容器
 - E. 薄手の円錐形杯
- III. 劃花文・刻線文装飾の無釉陶器
- IV. 劃花文技術と関連したバルボティン(貼付)技術の装飾をもつ無釉陶器
- V. 無釉陶器の頸部と把手
 - A. 簡素な粗製陶器の頸部と把手
 - B. 上質な陶器の把手
 - C. 押圧文の意匠を伴う幅広帯状の把手
 - D. パルメット文を伴う把手の接合部分
- VI. 赤色素地の無釉陶器
 - A. 大型で半球形の容器
 - B. 小型の薄手の容器
- VII. 薄手の無釉陶器

施釉陶器

- I. 装飾要素のない単彩釉陶器
 - A. 様々な形状の厚手の陶器
 - B. 精巧な形の容器
- II. 劃花文技術と削ぎ彫りによる簡素な装飾をもつ陶器
- III. バルボティン技術による貼付帯をもつ容器
- IV. 薄手陶器・単彩釉または多彩釉
 - A. 全体に釉を施した陶器
 - B. 部分的に釉を施した陶器
 - C. 光沢の強い色釉と装飾的の文字文様のある容器
- V. 施釉レリーフ(型押浮文)陶器
 - A. 緑釉単色レリーフ(型押浮文)陶器
 - B. 金色ラスタース単色レリーフ(型押浮文)陶器
 - C. 金色ラスタース釉で、緑色または緑青色の斑点を伴うレリーフ(型押浮文)陶器
- VI. 白釉上ラスタース彩陶器
 - A. 白釉(地)上金色ラスタース彩
 - B. 白釉(地)上褐色ラスタース彩
 - C. 白釉(地)上多色(金色、黄色、オリーブ色、褐色)ラスタース彩
 - D. 白釉(地)上多色(金色、明緑色、黄色、暗褐色)ラスタース彩

- E. 部分的に他の色と組み合わせられ、全体がルビーまたはチェリーレッド色のラスター彩
 - F. コバルト青色釉上金色ラスター彩
 - VII. コバルトブルーの文様と緑の斑状の流し掛けを伴う、クリーム色の錫釉陶器
 - A. クリーム色釉無文陶器
 - B. コバルトブルーの文様・緑色の斑状の流し掛け・植物装飾を伴うクリーム色釉陶器
 - C. コバルトブルーの文様・緑色の斑状の流し掛け・文字装飾を伴うクリーム色白釉陶器
 - D. 多色釉が全面を覆う陶器
 - VIII. 施釉陶製タイル
 - A. エメラルドグリーンまたは黄土色(オカ)釉の正方形床タイル
 - B. 彩絵施釉とラスター彩の正方形タイル
 - C. 彩絵施釉とラスター彩の六角形タイル
 - D. 連続文様の正方形ラスタータイル
 - IX. 東アジアから輸入された陶磁器
 - A. 灰色素地で青磁釉のシュタインツォイク(炆器)
 - B. 灰色素地で青緑釉のシュタインツォイク(炆器)
 - C. 灰色または白色素地で茶黄色または明緑釉のシュタインツォイク(炆器)
 - D. 黄白色がかった素地で無色釉のシュタインツォイク(炆器)
 - E. 黄白色がかった素地で白釉のシュタインツォイク(炆器)
 - F. 白磁
 - G. 単色か多色で斑状の粘性の低い流し掛け釉のシュタイングート
 - X. 産地不明の陶磁器(東アジアかメソポタミアか)
 - XI. 東アジア陶磁器の模倣品
 - A. 東アジア・シュタインツォイク(炆器)模倣品(無色釉あるいは白釉)
 - B. 東アジア・シュタイングート模倣品(流し掛け釉)
 - C. 東アジア・シュタイングート模倣品(流し掛け釉刻線文)
 - D. 東アジアの影響を部分的に受けた多彩釉粗製陶器
 - XII. 東アジア陶磁器模倣品(新しい年代で刻線文がつく)
- 以上『金沢大学考古学紀要』21号(1994), 22号(1995), 23号(1996)

以下本号

付録 I. 銘文 (エルンスト・ヘルツフェルト著)

- A. 押印陶器
- B. レリーフ(型押浮文)陶器
- C. コバルトブルーの文様と緑斑を伴うクリーム色陶器
- D. 金色ラスター彩陶器
- E. 中国のシュタインツォイク(炆器)
- F. 銘文を伴うその他の破片
- G. 後世のクーフィク繁栄期の素地に書かれた装飾文字

付録 II. 資料検査

- A. ベルリン工科大学物質研究所の分析
 - 1. 資料の性質とタイプ
 - 2. 釉以外の素地部分の化学的組成
 - 3. 資料IX. A-GとXI. Bの焼成中の反応と、素地と釉の変化の記録
- B. ハンス・アーノルド博士の分析
 - 1. 紅色に焼けた粘土で作られた無釉陶器
 - 2. 単色金色ラスター釉のレリーフ(型押浮文)陶器
 - 3. 白釉上ラスター彩陶器
 - 4. 白釉上ルビーレッドラスター彩陶器
 - 5. コバルトブルーの文様と緑斑を伴うクリーム色白釉陶器
 - 6. ラスタータイル
 - 7. 灰色素地で青磁釉のシュタインツォイク(炆器)
 - 8. 白黄色素地で白釉のシュタインツォイク(炆器)
 - 9. 単色か多色で斑状の粘性の低い流し掛け釉のシュタイングート

結 語

付録 I. 銘文 (エルンスト・ヘルツフェルト著)

A. 押印陶器

サマラの円形押印だけで装飾された無釉陶器は、3つのグループに分かれる。1つは動物描写が単純に表されたもので、僅か数片は元の市街から出土したが、その他は市街ではなく近隣の孤立した小さな遺跡から出土した。2つめのグループは単純な幾何文がみられ、市街で頻繁に出土した。3つめは稀れな例だが、文字をもち、しかもほとんどは陶工銘である。

N.20,21 (I-N.849と590) にウマル、N.22 (I-N.214) にウバイド、N.23 (I-N.1019) にジクリー、N.24 (I-N.1018) にイーサの銘が見られる。N.24だけは発掘出土品ではない。このような名前は明らかにアラブのものであり、この種の陶器が製作された地域を示すと推定できる。

文字は容易に判読できるクーフィク体で、当時の貨幣や墓石に見られる文字とよく似ている。隙間のない水平な横線に、ちょうど小さな掛け金が付くように文字が繋がるのが特徴である。横線部分も文字そのものを形成する一部分である。dālとkāfの文字は、互いに連続する可能性がある場合以外は、とくに違いは見られない。lāmは小さく短くて、mīmは横線の上の弓形か三角形で表し、rāとzâiは湾曲した短い弓の様な形であり、末尾のyâは右に向かって強く延ばして書かれる。

注目すべき例は6番の資料N.25 (I-N.236) で、明らかにギリシア文字のアルファベット、CIAと読める。違う解釈をする唯一の方法は、逆さまにしたアラビア・インド数字として理解することであろう。例えば ⅤⅠⅡ 712。この解釈は無理があり、これらはギリシア文字に違いない。サマラの大理石片にはギリシア文字の銘が数多く見つかるため、陶器にもギリシア文字の銘が存在する可能性は十分にある。

1. N.20;I-N.849;図16[金沢大学考古学紀要21号 サマラの陶器(1)の図を参照のこと];円形押印、径43mm、横方向の数行の列点の間に陶工銘、クーフィク体。 عمل عمر `Umar作。
2. N.21;I-N.590;図17;円形押印のある破片、二重の連珠円文の中に2行の陶工銘、クーフィク体。 عمل (عمل) `Umar作。
3. N.22;I-N.214;図18;円形押印、径40mm、斜線を伴う二重圏線の中に2行の陶工銘、クーフィク体。 عمل عبید `Ubaid作。
4. N.23;I-N.1019;図版I.3;図19;円形押印、径47mm、14の円弧を伴う環の中に2行の陶工銘、クーフィク体。 عمل زكري Zikri作。この名前は珍しいがサマラ時代にもある。Karmaten Zikrī al-Khorāsānī bei al-Tabarī 参照。
5. N.24;I-N.1018;図版I.5;図20;円形押印、径32mm、二重同心円の中に2行の陶工銘、クーフィク体。 صنعہ عيسى `Isā作。この資料はサマラ出土破片ではなく、字体もやや異なり、また通例の単語 'amal (…作)を用いる代わりに、やや格の高いšan'aが使用される。このことは注目に値するだろう。
6. N.25;I-N.236;図21;円形押印、径35mm、列点を伴う直線の中にギリシア文字が3文字。CIA すなわち δ ι α。

B. レリーフ(型押浮文)陶器

打ち出し細工の金属器に似たレリーフ(型押浮文)、明らかに金の輝きを模倣した色彩や釉、このような特徴をもつ陶器には、倣文字装飾が見られる。また、それに似た緑釉陶器の破片にも倣文字装飾が見られる。

このグループで唯一、倣文字でない本当の銘文は、ベルリンのフリードリヒ帝博物館に保管されているアハミンからの破片 IA Berlin 248に見られるだけである。この資料では、主に装飾として陶工銘が用

いられる(図173)。古いクーフィク体になじみのない人の目には、楔形文字のように見える。しかし、先端が幅広い楔形となる例は、ヘジラ暦3世紀の各種のクーフィク体に頻出する。図173では、縦横の線だけが細くて、それと対照的に先端部の楔形の大きさが非常に目立つ。これは基本的に、次に述べる陶器グループに見られるものや、カイロ出土のトゥールーン朝の銘文と同じ書体である。

N.145;I-N.843e(図版XI.5) 残念ながらかなり破損した口縁部の文様〔訳者注：連珠帯の部分のことか〕は、実際に見てのとおり左側は尖り右側は丸みを帯びており、これは幾何学的な装飾ではなく、šād ص の文字が二つ連続したものであろう。同片の半月形のような形は Allāh ا(ل)ل の中央の文字と理解できるだろう。すでにヘジラ暦3世紀には、文字が意味をなさず装飾にのみ用いられた例が知られており、とくにN.120A;I-N.762(図版VII.10)のような陶片や、類似の破片N.120;I-N.807(図版VII.8)によって示される。N.120A;I-N.762(図版VII.10)では、無釉の容器の器面に緑色釉で文字 lām - hā - nūm が繰り返し書かれている。一方のN.120;I-N.807(図版VII.8)の文字は、辛うじて كلمة「言葉」と読むことができる。書き手が慣れている場合に良くあることで、倣文字装飾と銘文は良く似ている。そして、以上の資料だけで判断するのではないが、これらの陶器を装飾した陶工は文盲だという見解は間違いと言ってよいだろう。

7. IA Berlin 248;図173;アハミン出土、陶工銘の一部、クーフィク体。 ابى نص الص

最初の[右端の部分の]名前は属格と思われるが、それは「…作」を意味する属格が単に عمل'amal か、صنعة san'a となるかによって決まる。名前は陶工の kunya(誰の息子かを示す)と、(陶工の出身地と関連がある) nisba が続くはずである。従ってその単語(nisba)は冠詞を伴って始まる。nisbaの最初の文字は、b, t, th, n, yのいずれかの可能性がある。また2番目の文字は不完全だが、dやkとは考えられず、むしろ š, ḍ, ṭ, ḏ の可能性が高い。この資料は間違いなくエジプトの製品だから、エジプトの地名をまず考えるべきだろう。あまり知られていない Badhaqûnî以外に相応しい地名を思いつかないが、製品の大きさからするとal-Badhaqûnîは長すぎる。一方、エジプト名とは限らないとすると、いくつかの可能性はある。al-Baṣrî(バスラ出身)或いは al-naṣrânî(クリスチャン)の可能性もあるだろう。

C. コバルトブルーの文様と緑斑を伴うクリーム色陶器

この陶器グループに含まれる遺物は、デザインによって2つに分かれる。第1のグループはもっぱら植物が青色で描かれ、その図柄の一部はササン朝の装飾図案に直接由来する。第2のグループは文字を器の主要な装飾として用いる。保存状態の良い遺物は、文字の配置によって次の2種類に分けられる。

(1) 文字は口縁から口縁へ鉢の内面を横切って帯のように1行の線となるように書かれる。

(2) 文字は鉢の内面にある正方形の四辺を縁どる。11.NO.192;図179では、正方形の辺となる線は、角の部分で一方が外に短く突き出る。この形は、'Aliという名前を4つ組み合わせでできた 'tchâr 'Ali(4つのアリ)と言われる、後の時代に主要な構図としてよく見られるものである。この構図は後の呪術的な正方形や同種の符号と関係をもつ可能性があり、当初から護符としての象徴的な意味をもったようである。このことは、我々の出土遺物の陶工銘が、吉祥祈念のまじないの句を伴うことから推測される。

8番の破片、NO.182;I-N407(ヴィクトリア・アルバート博物館904-1922),図176は、陶工銘「アフマー Aḥmar作」がはっきりとわかる。また、バルクワラ出土の9番の破片N.183;I-N536;図177に書かれた abî Khâli[d]も、陶工銘と理解すべきである。さらに「'Abdallâhの息子、K…作」という銘もあり、「'amal (…作)」で始まる破片もある。その他の破片(図107-118)は小さすぎて、完全な文章はもちろん、語句さえも読み取れない。しかし、保存状態のより良いものには判読できる銘があるため、これらの小破片も明確な文字をもつ資料として数えるべきである。他の遺物では文字は意味をもたない装飾としても使

われたようである。

文字の書体は、レリーフ(型押浮文)陶器や彩画陶器と同じで、トゥールーン朝エジプトで石に表された書体に当たる。サマラ出土の文字のある数点の破片もこの書体である。その特徴は、水平方向の太い線、垂直方向の短く早い筆の線、そして文字の先端が非常に太い楔形となることである。曲線的に連続する書き方、先端をはねあげる書き方など後の時代の特徴は、当然のことながらまだ見られない。技術上の問題のため、文字の形は不鮮明で繋がることもあり、文字の小さな環状の部分が付いたり途切れたりしているが、判読できないわけではない。添付した図174の文字表のほうが、言葉で説明するよりも書体をよく表している。すべてのクーフィク体アルファベットが破片に残るわけではない。10番 N.194; 図178で陶工銘の末端部に見られる美しい半パルメット文も、この書体の特徴であり、エジプトの墓石のもっとも美しいパルメット文に匹敵する。

フリードリヒ博物館にあるエジプト出土破片、IAベルリン1862は、当グループに似ている。粗製で筆写はあまり上手でない。見るからに大型の鉢底部に1行の青色の銘文が見える。残存する文字は.....ام قلبى ب..... であり、その下におそらく2行目と思われる ك 或いは بى の上端部がある。判読可能なのは、qalbi(私の心)というわずか1単語であり、詩歌か格言の一部のようである。

8. N.182;I-N.407;VAM704-1922;図176;1行の銘文、陶工銘、クーフィク体。 عمل الاحمر Ahmar作。al-Ahmar "赤毛の人" という名前は、この時代にはよくある。'amal(…作)のmīmの文字は、そこに熔着した粘土が付いたようで、途切れたままである。名前の末尾のrāは文字の頭が残るだけだが、Ahmarと復元して間違いない。

9. N.183;I-N.536;図177;バルクワラ出土、1行の銘文、陶工銘、クーフィク体。..... بى حال..... 右側の最初の文字は楔形で終わっており、左隣の次の文字と連続しないものである。左に連続していかない文字は5つあるが、そのうち問題となるのは alifか dālかということである。dālだとしたら、上方の横線の先端が見えるはずだから、alifであろう。もっともクーフィク体の alif は規則では短い横線が[縦線の]右側から書かれるが、この資料ではナスキー体の alif のように[縦線の]左へ書かれる。このことから[最初の文字は dālではなくalifであり]、ابى abî と読むことができるだろう。2番目の単語は容易に خالد Khālid と復元され、最後の文字である dāl の先端部がはっきり見える。Abū Khālidはこの時代にとっても多い名前である。誰その息子ということを表すkunyaがここでも属格であり、従って 'amal(…作)という属格を伴うはずである。従ってこの破片は عمل ابى خالد 「Abī Khālid作」という陶工銘の一部である。

10. N.194;I-N.1162;図178;1行の銘文、陶工銘、クーフィク体。 عمل ك..... لله 銘文の最初と終わりの部分のみが残る。破片から復元した浅鉢の大きさから、銘文の長さがわかる。最初の文字は 'amal(…作)。名前の部分はKで始まる。終わりの部分に見える -llāhからは、すぐに 'Abdallāhと復元できる。そうすると浅鉢の欠けた部分に、Kで始まる短い名前と بن(…の息子)の語があると都合が良い。Kで始まる短い名前は、例えば كثر , كرز , كعب Kathîr, Karz, Ka'bである。従って銘文を復元すると、例えば عمل كثير بن عبدالله 「'Abdullāhの息子、Kathîr作」となるだろう。

11. N.192;I-N.536b;図版XVIII3;図179;浅鉢の底部に、一辺長60mmの方形の銘文が巡る。クーフィク体。.....ه فسيفيك عم..... 「…ならばかなえられるであろう」。

この言葉は明らかにコーランのスーラ第2章131節 فسيفيكهم الله 「その者たちに対するに、アラーはあなたにとって十分であるだろう」を引いている。「アラーを信じるものはその敵に勝るであろう」という意味である。この決まり文句は例えばフリードリヒ博物館収蔵のハルン・アル・ラシッドの幡に見受けられ、また、ヘジラ暦3-4世紀の彫刻印章で所有者の名前に添えられているのをたびたび見た。

より頻繁に印章に用いられる決まり文句は **توكل على الله** 「アラーを信じよ」である。

この破片(図179)では動詞の前にアラーの名はないが、語末の **hâ** の文字が見える。従って実際には、**الله على توكل** 「アラーを信じるならばかなえられるであろう」と書かれていたはずである。12.の所見を参照のこと。下方に延びる左側の辺には'ainとmîmの2文字 **.....عم** が見えるので、**عمل** 'amal(…作)の語を復元すべきで、これが銘文の始まりに違いない。従って銘文は元は次のようなものであった。

عمل فلان بن فلان (النيسبا) الله فسيكفيك 「yの息子(またはz出身)、xの作、アラーを信じるならばかなえられるであろう」。

D. 金色ラスタースター彩陶器 N.147-164, 201

サマラ出土の金色ラスタースター彩陶器には器とタイルがある。

銘文のある器はとても珍しい例である。ひとつはN.152;I-N.1099;図版XVI.1の頸のある卵形水差で、肩部に楕円が描かれ、装飾は戯れ書きのような線だけの部分と、文字や数字を縦に並べた部分が交互になる。類似の破片があるため、このような装飾法が稀ではなく特徴的なものであったことが分かる。もう1つは、12.の小型の鉢に見られる銘文である。それは2つの句だけで表された決まり文句、「アラーを信じるならばかなえられるであろう」であり、この解釈はフリードリヒ帝博物館所蔵の同時期のエジプト出土破片口縁部に見られる同様の言葉によって裏付けられる。銘文の書体は白釉に青彩の陶器と同様のクーフィク体である。

出土した金色ラスタースター彩陶器には、陶工銘は見られなかった。

タイルのうち3片は、裏面に短い銘文の痕跡がある。あまりに粗末で損傷がひどいため、特定の文字は読みとれない。銘文の書体は、先に述べてきた総ての資料に見られたようなクーフィク体ではなく、非常に古いパピルス文書の文字に近い斜字体である。文字はおそらく陶工銘かそれに類する略記の跡である。ことによるとタイルの配置のための記号かもしれないが、簡単な図柄の場合にはそのような記号はあり得ないし、表側と同じように金色ラスタースター彩で焼かれているので、後で書き加えた記号でもない。

12. N.151;I-N.1150;図版XIV,XV;図180;小型の鉢の底部に1行の銘文、クーフィク体。**توكل يكف(يك)** 「信じるならばかなえられるであろう」。

最初の語が **توكل** であるのは明らかである。通有の **الله على** 「アラーを信じよ」かと思われるが、アラーという語ではなく、とても縦長に書かれた語頭の文字 **yâ, kâf** そしてわずかに損傷した **fâ** が続く。**يكفيك** の他には復元しようがない。さらに語尾の **ك** の上端も残っている。従って、この破片の銘文は、11.に見られた類似の銘文によって明らかに復元できる。

フリードリヒ帝博物館所蔵エジプト出土の金色ラスタースター彩陶器の破片(IAベルリン187)も、口縁に同様の句が見える(図181)。

すなわち、この決まり文句はサマラ時代には典型的に認められるものである。しかし、私の知る限りでは、この句は後の時代には稀になるか消滅してしまう。

13-15. タイル裏面に金色ラスタースター彩の銘文が残る。N.201;I-N.749と867。これらは斜字体のアラビア文字だが、損傷が激しいため解釈は困難である。かなりの想像力を働かせると、I-N.867;図182を **عمل** 'amel(…作)と読めるかもしれない。もう一方の破片I-N.749;図183は **بن هر** …の息子の-hrかもしれない。-hrは、ペルシア語にも一般的な文字の組合せである。これらの読み方は疑わしく、あまり重きを置く価値は無い。

E. 中国のシュタインツォイク(炆器) N. 206-226

ジュサーク Djausaq al-Khâqânî の大型ピットの南東にある貯蔵室で発見された、多量の中国のシュタインツォイク(炆器)には、底部の裏にあせた墨書銘文が残る破片がいくつかある。その書体は、パピルス文書の筆記体のような非常に雑なものである。色あせた墨書の文字は多様に解釈でき、ほとんど判読できない。2片は間違いなくアラビア数字があり、従って財産目録の番号である。1片は検定の印しのようだ。単語のいくつかは器の種類の名称のようである。もっとも注目すべき例は19番で、これは墨書銘文の末尾に **صين** *ṣîn*、すなわち中国という単語がある。この文字は鮮明だが、前後のつながりは明らかでない。これらのアラビア語の墨書銘文は、陶工銘や所有者の銘ではないのは明らかで、器の製作時に付けられたのでもなく、従って単に器の名称と番号を表すものである。

16. N.218;I-N.784a;図184;浅鉢の底部に2行の墨書文字。図版XXX 2。上の行は数字がはっきり見える。一つは間違いなく ۸, 8 で、おそらく ۵۸, 58 である。下の行は試行錯誤しても判読は不可能である。ことによると器の種類の名称かもしれないが、陶工銘ということはあるにない。

17. I-N.762,807,875;図185;浅鉢の底部に2行の墨書銘文。上の行は **لعص** のように見える単語があるだけである。下の行は逆さまに書かれており、おそらく ۴۱۱, 411 の数字である。従って、これも財産目録番号の注記である。

18. I-N.570(762-807/8);図版XXXVI 2;図186; 墨書銘文が1行ある浅鉢底部、直径約11cm。

非常にくずれた斜字体の文字で、とくに始めの部分が何文字か欠落しているようで不鮮明である。例えば、**وحا روسه فرانه** と読める可能性がある。これらの文字の読み方は計算すると約3,000あり、以下の解読の試みは不確かなものである。動詞 **راى** は、「見る」と「訪れる」の二通りに読むことができる。**وجا روتته فرائها** 「そして、それ(男性)は見に来て、それ(A)を見た」あるいは **فرائها** 「そして、それ(男性)は見に来て、それ(女性)を訪れた」。

あるいは、これらとまったく異なり、最後の3文字は数字の **۱۸۱** 181にも見える。この行の上方には、ことによると四分円が記されていたかもしれない。そして、この行の下にあるのは数字の **۵, 5** かもしれない。この数字は、検定の印でないとするれば、明らかに財産目録番号であり、むしろ陶工銘ではあり得ない。

19. N.212;I-N.787;図187; 緑釉水差の内側に墨書銘文(図版XXIII.2)。この文字もほとんど読めない。曲線状に続く線に短い線が垂直に交差する部分はとくに不鮮明である。クーフィク体で書かれた始めの文字は、**س** *sîn* の結合形のようである。それに続いて短く上を向いた鉤形に見えるのは明らかに **mîm** であり、次は **râ**か **yâ**のようで、**nûn**ではないだろう。わずかに離れたところから続く文字は **صين** *ṣîn* 「中国」としか解釈できない。ここで **ص** の下にある二本線は、**yâ** の下に添える発音を示す点々である。今日の筆記体でも一般的に行われる、長くのばす **yâ** と **nûn** を合わせた書き方である。従って、非常に不鮮明な始めの部分から後は、例えば、**صين صمر** か、**سمى صين** となる

20. I-N.787;図188;墨書銘文。その文字は **لماكى** または **بعالى** のようである。

21. I-N.849;図189;墨書銘文。**صرد** または **عصر المد** である。

F. 銘文を伴うその他の破片

陶器の種類によっては分類できない破片もいくつかある。それらはいずれも、墨書、または稀に刻線による銘文が、粗雑な筆記体で記される。

22番は陶工銘か所有者銘がある。次の2つには器の容量に関する記載、つまり器の規格を検定した印し記される。よく知られているクーフィク文字のガラス押印も、ガラス器の容量を示すものである。他のいくつかの破片は、銘文とは何も関係が無いと思われ、たまたまそこに文字を記しただけのようであり、従ってオストラコンとみなすことができる。その他は余りに粗末で、どこにも分類できない。

22. I-N.235;図190;ロンドン、ブリティッシュ博物館。無釉陶土(器)に刻まれた、旧式の筆記体の銘文。2片。

この銘文は3行に見えるが、左側がいくらか楔状に近づいているので、1行目の言葉はおそらく2行目に書き添えられたと理解してよいだろう。1行目の言葉は عمل.... であり、これは間違いなく عمل と復元できる。従ってこれに続く2行目の文字は陶工の名前と考えられる。強いて読むと、現代では"左官用のこて"を表す مالى が唯一の可能性であり、これは(陶工の)通称名、laqab [訳者注: ニックネームを意味するアラビア語]かもしれない。そうすると途中で بن「息子」が抜けていると思われ、عمل مالى (بن) العباس「'Abbāsの(息子)Mâliq作」と読める。

もう少し自由な見方をすると مالى لعرب... (بن) العباس「'Abbasの(息子)F/Q-r/z - …のために作られたもの」と読める。従って、この場合は陶工銘か所有者銘である。「…のために作られたもの」は、後に頻用された مما عمل برسم「…の命により…のために作られたもの」より簡略化な、ごく一般的な決まり文句であろう。

23. I-N番号なし;図191;粗製の破片に、2行の筆記体の墨書銘文。長さ52mm。

اربعة وثلاثين رطلا / او اربعة وثلاثين منا 「34 ratl または(?) 34 man」。ratl は、例えばポンドやリットルのような単位である。したがって 34 ratl はこの壺の容量に関する記載である。しかし、ratlの何倍もの量を表す単位である manに、なぜ同じ数字が繰り返されるのか分からない。だが、manや او「または」という語が、はっきりと読みとれるわけではない。

24. I-N.233;図192;ロンドン、ブリティッシュ博物館。粗製の破片に1行の墨書銘文。長さ85mm。

بعه رطل رطلا 211 間違いなく確実なのはratlanという語であり、アラビア数字が後に続く。この単位の語は対格なので、その前には11から99の間の数詞がくることになる。この銘文の始まりは اربعة 4か سبعة 7, تسعة 9の末尾のように見える。それに続く文字を読むのは難しい。まず、رطل と読めるが、وثلاثين までの間のすべての種類の数詞も可能である。

25. I-N.182;図193;建築用に使われた大きな円筒形水差の墨書銘文、3行、筆記体、長さ10cm。

بسم الله الرحمن الرحيم / ليعملو برعم بو / ن يعرار رحله はっきりと読みとれるのは始まりの部分、Basmalaだけである。これは、「アラーの名において、云々」という言葉なので、水差とは関係のない内容の句のように見える。2行目には語根 عمل と زمع から派生した語、3行目には قرو と رحل の派生語があると推測される。意味は明らかでない。

26. I-N.234;図194;ロンドン、ブリティッシュ博物館。粗製の破片に長さ45mmの墨書銘文。يا نبى「おお、預言者よ」。このように読めるが、唯一の可能性というわけではない。最初の音節に長母音 a があり、終わりに長母音 -î のある人名とも考えられる。最初の文字の上に発音を示す点があるのか、あるいは文字を雑に書いたので点に見えるのかという疑問が残る。最後の -yâが2つの点を伴うのは間違いない。このような点の使用は、すでに صين「中国」という言葉に見られた。

27. N.88;I-N.734;図版IX5;図195;赤い無釉の素地の小破片で、刻線による3行の斜字体の銘文を伴う。最初の語は動詞の3人称複数語尾のようである。その次は、الله「アラー」に見えるが、余った alifを

lâmの後半部ととれば、رسوله「彼の預言者」と読みとれる。しかし非常に不確かである。

28. I-N.741;図196; ロンドン、ブリティッシュ博物館。斜字体で2行の文字が書かれた粗製の陶片。最初の文字は s-r-b と読める。2行目の文字は色々な解釈が可能で、破片の状態からは解読できない。

29. I-N.170;図197; ロンドン、ブリティッシュ博物館。この破片は型のように見えるが、文字は鏡像になっていない。2行のクーフィック文字。文字の垂直線と横線が、装飾的に結びついている。على 'ali または 'alâ、および بكر bakr と読める可能性がある。

30. I-N.715b;図198; 小型の卵形浅鉢の底部破片。白釉が施され、押印による文字がある。高さ1.50cm, 直径5cm。三角形の部分は文字のようである。たとえば、右側の三角形は結合形の mîmであり、左側のが wâwと考えられる。しかし中央の三角形は文字ではない。なぜなら、このように右を向いた文字は無いからである。このような三角形はクーフィック文字の先端の楔形を空白にした部分かもしれない。そうすると例えば、.....ممل..... 「W…作」と読めるだろう。

G. 後世のクーフィック繁栄期の素地に書かれた装飾文字

巨大なサマラ遺跡の中で、中世の薄い居住層が9世紀の遺跡の上に広がるのは川と現代の市街の間で、川岸へ通じる道の北側である。廃品の量からみて、ここは窯が立地していたらしいと特に考えられる場所である。文字から考えるかぎりでは、これらの破片はヘジラ暦6世紀つまり紀元13世紀より古くはないと思われる。

31. I-N.278z;図199;ロンドン、ビクトリア・アルバート博物館、C.676-1922. 赤味がかった陶土の破片で、白化粧土と鉛釉が施され、流し掛けによる緑斑を伴う。口縁沿いの銘文が判読可能なのか、あるいは単なる装飾なのかは決められない。ある程度確かなのは、始めの語が「アラー」と読めることだけである。曲線的に連続する文字や、書き終わりが跳ね上がったたり、端部が植物となるなどの書き方は、ヘジラ暦6世紀半ばより古いことはあり得ない。

32. I-N.278k;図200; 上記と同じ種類の破片で、文字列を伴う。クーフィック文字 ان طان طان が、かなり規則正しく繰り返されているのが見られる。これは後の時代に頻用される عزّ لولانا السلطان 「我らが君主スルタンに栄えあれ…」という決まり文句から変化したに違いない。従って、文字の書き方だけでなく内容もかなり後の時代であることを示しており、ヘジラ暦600年より遡ることはおそくないだろう。

33, 34. I-N.278l,m;図201,202; 上記と同じ種類の破片2片。これらは、より粗雑になった破片である。この文字は前の(32の)銘文と同様であることが図からわかるが、主要な部分が欠けて付随的な装飾部のみが残る。しかし、これ以上の推論を導き出せないのは明らかなことであり、もはやここで論ずるに及ばない。

付録Ⅱ. 資料検査

A. ベルリン工科大学物質研究所の分析

1914年にIX章のA-G, XI章のBの陶磁器の中から研究所に資料を渡し、同年11月14日に次のような分析結果が出た。

1. 資料の性質とタイプ

a) IX章. A-D. 灰色か白黄色の素地で、それぞれ青磁色、青緑色、淡青色、無色の釉がかかるシュタインツォイク(炆器)、5片。

灰黄色(焼成中に黄色から灰色に変わる)の2片は吸水性がなく、灰色の2片と黄色がかかった灰色の1片は、薄い貝殻状の締まった素地。いずれも薄い透明な釉が施される。2片は採集されたときから細かな貫入があった。他の2片は乾燥機で熱を何回か加えると貫入が入り〔訳者注：加熱器か。貫入のできるのは乾燥のときではない。〕、別の1片には貫入は入らなかった。3片は施釉された輪高台で、1片は輪高台にほとんど釉がない。このような結果から、これらの陶器はシュタインツォイク(炆器)であると確められた〔訳者注：英語のStonewareに対応するドイツ語は二つある。Steinzeugを「シュタインツォイク(炆器)」とし、Steingutは原文のまま「シュタイングート」とする〕。

b) IX章. E. 白黄色がかかった素地で白釉のシュタイングート、2片。

吸水性がなく硬いが、IX章.F.(白磁)よりは締まっておらず、少しざらざらで、ルーペで拡大して見てもまだ少し光沢があり、色は黄味がかかった白色である。釉は透明で細かな貫入があり、白化粧土上にかけているように見える部分もある。乾燥機で貫入が増加した。1片は輪高台で下方は無釉である。このような結果から、これは白色のシュタインツォイク(炆器)かシュタイングートであると確められた。

c) IX章. F. 白磁、2片。

吸水性がなく本当の磁器の硬さである。少しざらざらした薄い貝殻状の割れ口で、ルーペで拡大すると少し光沢があり色は白い。釉は厚さ約0.1~0.2mmで、透明でガラス化しており貫入はまったくない。乾燥機で熱しても釉には貫入が入らない。1片は輪高台をもち、底部外面の平らな部分は無釉である。このような結果から、この資料は白磁と確かめられた。

d) IX章. G. 単色か多色で斑状の粘性の低い流し掛け釉のシュタイングート、4片。

吸水性が高く、淡紅色から淡黄色(分析で加熱すると、紅味をおびた色から黄味をおびた色へ変わる)。白化粧土上に淡色の透明釉がかけられ、緑、オリーブ緑、緑茶色の斑点を伴う。釉には貫入があり、熱にさらして乾燥させると貫入は多くなった。このような結果から、この資料は(吸水性の高い素地の)質の良いシュタイングートである。

e) IX章. B. 東アジア・シュタインツォイク(炆器)の模倣品。流し掛け釉による彩色。3片。

どの資料も吸水性が高く、あまり締まっていない普通の陶器である。1片の素地は汚れた黄色味をおびた紅色の断面で、内面は白化粧土上に緑の斑点のある淡色の釉、外面と輪高台には白色不透明釉がかかる。粗い貫入が内面にある。2点めは淡黄色の素地で、淡色の釉が内外面にかかる。釉には貫入があり、白化粧土の上に緑色の斑点がある。3点めの素地は灰黄色の断面で、上方で1mmの厚さの白釉がかかり、釉の貫入は素地に達する部分もある。輪高台を含む下方には、より薄く不透明釉がかかる。

2. 釉以外の素地部分の化学的組成

前述の分析で示した標準的な資料(同じ量)である。XI章. B(東アジア・シュタインツォイクの模倣品)の資料は他と違いが見られる。

成分	資料					SO ₂ をCaSO ₄ として 計算した場合 %
	a IX.A-D %	b IX.E %	c IX.F %	d IX.G %	e XI.B %	
珪酸(塩)	74.68	63.28	60.25	63.59	46.82	47.41
アルミナ(チタン酸含有) 注1	18.88	32.09	36.3	29.27	12.49	12.65
酸化鉄	2.36	1.27	0.7	2.06	6.38	6.46
酸化カルシウム	0.41	0.46	0.94	1.68	16.81	16.49
酸化マグネシウム	0.51	0.51	0.63	0.47	6.21	6.28
アルカリを酸化カリウムと算定	2.23	1.24	1.21	1.64	2.49	2.52
熱による消失	0.39	0.73	0.73	1.07	9.09注2	8.46

注1 そのうち、チタン酸 TiO₂は、IX.A-D 0.6%, IX.E 1.1%, IX.F 0.32%, 0.93%。

注2 乾燥による消失が100℃で1.52%と計測された。熱による消失 9.09%には、硫酸亜水物(SO₃) 0.73%、石膏(CaSO₄) 1.24%、炭酸(CO₂) 6.79%が含まれ、炭酸(CO₂) 6.79%は炭酸石灰(CaCO₃) 15.63%に相当する。約1%の消失物質には石膏が多く、これは化学分析を行う前に水洗によって素地からおちたものである。

化学組成分析によると、IX章.A-G(東アジアから輸入された陶磁器)の原材料は基本的には純粋な粘土(カオリンを含む)である。XI章(東アジア陶磁器の模倣品)の資料は純粋な粘土ではなく、自然にあるような粘土を多く混合している。

3. 資料IX.A-GとXI.Bの焼成中の反応と、素地と釉の変化の記録

資料が作られた時の焼成温度を確定するために、いくつかの焼成実験を行った。資料の小片を坩堝に入れ、ゼーゲル・ガスオープンのなかでゼーゲルコーンとともに熱せられた。素地と釉に起こった変化を以下に記述する。

ゼーゲルコーンの融点 相当するおよその摂氏 °C	7	8-9	12-13
資料 a 素地 (IX A-D)	角はほとんど損なわれない。 黄色がかかった破片がやがて灰色に変色する。 灰色の破片のおよその焼成温度。	光沢をもち始める。	角が少し丸くなる。 まだ形は崩れないが、明らかに光沢がある。
釉	角は丸くなり、なだらかなアーチ形である。 流れ落ち始める。		
資料 b 素地 (IX E)	角は尖っている。 やがて灰白色に変色する。 断面は光沢がさらに目立つ。 上記以上の温度で焼成された	光沢がさらに目立つ。	角はまだほとんど損なわれていない。
釉	角は溶けて丸くなる。貫入。	—	気泡がはじける。
資料 c 素地 (IX F)	角は尖って、崩れていない。		
釉	角はもはや尖ってはいない。	角は溶けて丸くなり、 なだらかなアーチ形である。 まだ流れ落ちてはいない。 気泡が少しある。 上記以上の温度で焼成された	
ベルリンの素陶磁器製作所の磁器浅鉢	—	角は尖って、崩れてはいない。	
釉	—	角はもはや尖っていない。	縁のふくらみに気泡がある。 上記以上の温度で焼成された

ゼーゲル コーンの融点	08 a	1 a	所見
相当するおよ その摂氏 °C	940	1100	
資料 d 素地 (IX G)	少し変色(黄色がかかる)。 中庸の吸水性だが、 収縮、変形しない。 角は尖っている。黄色の 破片のおよその焼成温度	より変色(濃黄色になる)。 吸水性あり。収縮、変形、 せず、角は尖っている。	素地は1aのゼーゲル コーンよりずっと高い 温度に耐えられる。 XI Bの資料は(分析した かぎりでは)940°C以下、 約 400°Cで焼成され、 IX Gの資料の焼成温度 より低い。XI Bの容易に 融解する素地は、IX G の焼成温度には耐えられ ない。
釉	完全に溶け、澄んだ色に なる。貫入が消える。 流れ落ちてはいない。	流れ落ちる。	
資料 e 素地 (XI B) サンプル 1	変色する(明灰色になる、 黄色がかかった赤みを 帯びる。吸水性あり。 変形せず。上記以上の 温度で焼成された。	濃いグレイオリーブ がかかった黄色。まだ 吸水性がある。収縮率は およそ十分の一であり 変形する。	
資料 e 素地 (XI B) サンプル 3	変色する(黄灰色-黄色 がかかる色)。吸水性が まだ高い。上記以上の 温度で焼成された。	濃いグレイオリーブ がかかった黄色。まだ少し 吸水性がある。収縮率は およそ十分の一であり 変形する。	
釉	内面の釉は溶けて襞状に 流れる。まだ完全に 覆っている。	外面の釉は、溶けて透明 度を増して流れる。	

吸水率

サンプル 番号	資料 a (IX.A-D) %	b (IX.E) %	c (IX.F) %	d (IX.G.) %	e (XI.B) %
1	4.23	6.63	1.29	6.92	21.5
2	4.44	3.60	0.05	13.14	29.6
3	0.10	—	—	10.89	19.4
4	0.67	—	—	14.81	—
5	0.18	—	—	—	—

密度

サンプル 番号	資料 a (IX.A-D) %	b (IX.E) %	c (IX.F) %	d (IX.G.) %	e (XI.B) %
1	2.201	2.189	2.236	2.301	1.730
2	2.237	2.270	2.346	2.067	1.611
3	2.266	—	—	2.143	1.898
4	2.227	—	—	1.961	—
5	2.162	—	—	—	—

IX.A-Fのより締まった資料では、蒸留水の中での数時間にわたる煮沸により始めて同じ比重に達した。

B. ハンス・アーノルド博士の分析

1. 紅色に焼けた粘土で作られた無釉陶器 (VI章. B, VII章)

a) 浮文をもつ紅色素地(87)は、鉄分を含む粗い粘土でできている。素地中には金箔状の粒があり、主に表面近くに集まる。これは雲母であり、その下の素地が透けて見える。表面近くに集まるのは雲母の特徴である。浮文は器を粘土型で成形するときにできたことが、撫ぜたことによる溝状線からわかる。

b) 88の素地から採集した暗紅色の小片は、化粧土(Unterglasur)をかけて焼いた粘土である。酸化鉄が色をだすのに利用されている。この破片も撫ぜて成形したときの溝状線を残す。

分析で次のような結果がでた。

珪酸(塩)	49.40 %	組成分析	
酸化アルミニウム	29.39 %	長石	16.15 %
酸化鉄	8.17 %	粘土	69.52 %
酸化チタン	0.28 %	石英	7.97 %
石灰	3.65 %	白亜(石灰岩)	6.36 %
酸化マグネシウム	1.59 %		100.00 %
アルカリ(K ₂ O)	2.80 %		
水	1.82 %		
熱による消失	2.59 %		
	100.19 %		

2. 単色金色ラスタースターのレリーフ(型押浮文)陶器 (V章. B)

レリーフ(型押浮文)のあるファイアンス。素地はファイアンスのようで、石灰(Kalk)を多く含む。しかし、釉については、ファイアンス釉は用いられず、鉛が主で錫を少し含む釉である。このような技術が、粗製の釉を用いた原始的なファイアンスと本質的に違うのは明らかである。透明釉は還元炎で焼かれ、アルカリ-石灰珪酸塩と金色ラスタースターから成る。レリーフ(型押浮文)は型で作られた。

珪酸(塩)	45.76 %	組成分析	
酸化アルミニウム	29.39 %	長石	4.99 %
酸化鉄	7.68 %	粘土	31.19 %
石灰	19.94 %	石英	26.29 %
酸化マグネシウム	6.52 %	白亜(石灰岩)	37.53 %
アルカリ(K ₂ O)	0.80 %		100.00 %
水	1.20 %		
熱による消失	3.71 %		
	100.18 %		

3. 白釉上ラスタースター彩陶器 (VI章. A-D)

よく焼かれたファイアンス片であり、不透明釉は素地に十分に付着していない。クロームと鉄の彩画を伴う釉は他の資料よりも均一に溶けており、青みがかかる陶土の上に施される。釉は部分的に素地から剥がれている。

この種類の他のファイアンス片は、同じように青みがかかる陶土であり、鉄色の彩画がある。金色ラスタースターは蔓草だけに使われる。

蔓草はおそらく微量の金で描かれたのであろうが、化学的に確かめられなかった。顕微鏡で500倍の倍率で観察すると、細かい金箔がある。

これらの破片は前に述べたものと基本的に技術が異なる。これらもファイアンスだが、素地も釉も前述のものよりもはるかに高い完成度を示している。

青緑色の破片161[訳者注: 161は多色ラスタースター彩]はファイアンスである。素地のなかに石灰が見られるし、石灰を含む陶土の独特の臭いもする。釉は、後に炭酸を吸収したために剥がれている。素地には、コバルト釉の上に銅釉が施される。表面にコバルト釉が厚く付いた部分もある。あまりに厚く掛けられた釉が施釉か焼成のときに流れ落ちたため、何本も縞がある。

4. 白釉上ルビーレッドラスタースター陶器 (IV章. E)

鉤の付いた器(162)の素地は、部分的に赤色である。この素地はシュタインゲートであり、ろくろ製で、無色の釉がかかる。この資料では、釉は十分溶けておらず、透明になっていない。釉の上に、酸化銅から成る赤い膜が部分的に付く。ラスタースターは銅によるもので、表面が還元されて生じる。赤は中国で作られたのと同じ方法で作られた。

珪酸(塩)	45.29 %	組成分析	
酸化アルミニウム	13.69 %	長石	11.78 %
酸化鉄	8.33 %	粘土	29.39 %
酸化チタン	0.28 %	石英	24.23 %
石灰	19.94 %	白亜(石灰岩)	34.60 %
酸化マグネシウム	8.24 %		100.00 %
アルカリ(K ₂ O)	1.96 %		
水	0.50 %		
熱による消失	2.34 %		
	99.96 %		

5. コバルトブルーの文様と緑斑を伴うクリーム色白釉陶器 (VII. B,C)

a) I-N.408(168)の番号がついた資料は、石灰を含む陶土を使って作られたファイアンスであり、コバルト釉はアルカリが少ない。アルカリ含有量が少なすぎるため、コバルトの色調は鮮やかでない。素地には化粧土が施され、その上に釉がかかる。

珪酸(塩)	45.90 %	組成分析	
酸化アルミニウム	12.60 %	長石	23.54 %
酸化鉄	7.90 %	粘土	18.02 %
石灰	18.14 %	石英	27.36 %
酸化マグネシウム	7.35 %	白亜(石灰岩)	31.08 %
酸化チタン	0.20 %		100.00 %
アルカリ(K ₂ O)	3.00 %		
水	1.19 %		
熱による消失	3.37 %		
	100.25 %		

b) I-N.409は、同様に少し鉄を含む粘土のファイアンスで、化粧土がある。釉はコバルトと銅を含む。外郭線がはっきりしないのは、釉のなかに銅が少し溶解したためである。ろくろ製のファイアンス浅鉢の、褐色、白色、緑色が混ざった部分には薄い化粧土があり、銅マンガノ釉で覆われている。部分的に真珠層のように輝く。このような干渉色は、非常に薄い釉層によって引き起こされる。釉層は素地の上にはっきり見えている。資料はプラチナの坩堝で加熱しているときに溶けだした。

分析		組成分析	
珪酸(塩)	47.30 %	Albit	12.36 %
酸化アルミニウム	14.21 %	粘土	28.93 %
酸化鉄	8.40 %	石英	24.61 %
石灰	19.59 %	白亜(石灰岩)	34.10 %
酸化マグネシウム	8.13 %		100.00 %
酸化チタン	0.24 %		
アルカリ(K ₂ O)	1.50 %		
水	0.67 %		
熱による消失	0.11 %		
	100.15 %		

c) I-N.410は、I-N.408よりもやや硬い、ろくろ製のファイアンスの素地で、釉は不透明である。裏面は不透明な銅釉で、表側の面は鉄分をいくらか含むコバルト釉である。

6. ラスタータイル (VIII章. B,C)

a) I-N.802(200)は不透明白釉の施されたファイアンスでできたラスタータイルである。褐色は少し還元された鉄によって生じた。

b) I-N.785(197)はファイアンス素地で、釉上にラスターが施される。素地のうえに不透明白釉がかかる。その上に、酸化鉄による赤、酸化鉄と酸化マンガノによる黒、酸化鉄による黄色の3色で彩画さ

れる。ラスターは赤と黒の部分だけに施される。その部分には、薄い銅の層が後から加えられたようであり、さらに還元炎の状態で焼かれている。この資料は意図的に多孔質に作られている。しかも木材の長い繊維が顕微鏡ではっきりと見えるので、おそらくおがくずを混ぜて作ったのであろう。

7. 灰色素地で青磁釉のシュタインツォイク(炆器) (IX章. A)

分析によって次のような組成が示された。

分析		組成分析	
珪酸(塩)	75.02 %	長石	5.90 %
酸化アルミニウム	19.51 %	粘土	45.60 %
酸化鉄	2.84 %	石英	48.50 %
酸化マグネシウム	0.26 %		<hr/>
アルカリ (K ₂ O)	1.02 %		100.00 %
石灰	0.56 %		
水	0.20 %		
熱による消失	0.11 %		
	<hr/>		
	100.03 %		

釉は酸化鉄を含む。すでにいくらか磁器になっているが、粗製のシュタインツォイク(炆器)と呼ぶべきものである。

8. 白黄色素地で白釉のシュタインツォイク(炆器) (IX章. E)

2片の白色破片は磁器でもなく、シュタインツォイク(炆器)でもない。割れ目は光沢がないし、素地は密でないからである。インクを垂らすとすぐに素地の中に吸い込む。粗製のシュタインツォイク(炆器)と呼ぶべきである。釉はアルカリ釉で、錫も鉛も含まれない。白色素地の分析は次のようである。

珪酸	59.55 %	製作に用いる素材の量の概略を知るために、 組成の分析も挙げておこう。		
酸化アルミニウム	37.26 %			
酸化鉄	0.26 %			
石灰	1.33 %			
アルカリ (K ₂ O)	0.70 %		長石	3.63 %
水	--		粘土	81.02 %
硫酸塩(SO ₄)	0.65 %		石膏	0.92 %
熱による消失	0.37 %	石英	14.43 %	
	<hr/>		<hr/>	
	99.72 %		100.00 %	

9. 単色か多色で斑状の粘性の低い流し掛け釉のシュタインゲート (IX章. G)

緑色と白色の釉のシュタインゲート(I-N961)は、割れ目の密度が不均一であり、焼成温度が低いことを示す。多くの溶剤を加えて、あまり高くない温度で焼成している。最初に酸化炎で、次に還元炎で焼かれた素地であり、原始的な技術で生産し焼成されたことを示す。釉は銅を含む。しかも緑色に発色する酸化銅(*grunes Kupfersalz*)が素地の上に塗られており、アルカリに富む釉に部分的に溶けている。

分析は次のような結果であった。

珪酸(塩)	59.33 %	組成分析	
酸化アルミニウム	31.72 %	Albit	14.19 %
酸化鉄	1.40 %	粘土	67.15 %
石灰	2.92 %	石英	13.85 %
酸化マグネシウム	0.80 %	白亜(石灰岩)	4.81 %
酸化チタン	0.20 %		<hr/>
アルカリ (K ₂ O)	1.82 %		100.00 %
水	0.67 %		
熱による消失	1.45 %		
	<hr/>		
	100.31 %		

結 語

ここで再度、簡単に調査結果をまとめてみよう。発掘期間中にサマラ遺跡地域で発見された陶磁器は、少数の例外を除いて、半世紀(838-883年)続いた都市の最盛期と関連している。そして出土陶磁器は、より古い器が使われていた数十年と、都市のゆっくりとした衰退期間の後の数十年を加えたとしても、最大でも100年間、つまり9世紀全体の中に含まれる。

材質と技術で陶磁器を分けると、粗製の無釉陶器(I.A,B; II.A-C; III; IV; V.A-D)と粗製の施釉陶器(I-III; XI.D; XII)は多かれ少なかれ硬い焼きで、粒の粗い淡黄色か淡灰色の素地である。これらは、よく水簸した淡灰色か淡黄色の粘土を用いた、比較的または非常に薄い無釉容器(I.A; II.D,E; V.B)や、全面または部分的に施釉された類似の陶器(I.B; IV.A-C)と同様に、多分サマラで、あるいはいずれにせよメソポタミアで作られたであろう。ラスタースタイルの陶器とクリーム色釉上コバルト青彩陶器(VI; VII)の注目すべき2つのグループは密接な関連がある。用いられた粘土は、どちらも同じ非常によく水簸した黄味がかかる白色の粘土や、場合によっては青色がかかる粘土(付録II.B.3-5)で、我々がサマラ陶土と呼ぶものである。これらの技術的、工芸的に注目すべき特殊な陶器の生産地も、サマラそのものと結び付けられる。これと技術的に一致する陶器がイスラーム世界の他の地域、ペルシアやエジプトで同時に作られたと想定しないかぎり、メソポタミアからサマラの陶器が輸出されたという考えは正当であろう。これは、カイラワンのラスタースタイルや、受入れ者であるペルシアの好みに合わせた装飾によって証明される。エジプトで発見されたサマラのラスタースタイルの陶器がいくらかがっしりと形作られているのは、長距離の運搬を考えてのことと説明できるだろう(VI)。

他には施釉レリーフ(型押浮文)陶器(V)があり、緑釉陶器と、金メッキを直に施したかのような金色ラスタースタイルで覆われた陶器に分けられる。良く水簸した非常に硬い特有の素地で、黄紅色からレンガ赤色である。このグループとエジプトの陶器の関係を指摘した。しかし、この種の陶器の産地とラスタースタイルの発明を、エジプトに変更するのは適切ではない。注目すべきこの種類もメソポタミアが起源と考えたい。

その他のまったく別の技術のサマラ出土陶器に関しては、今まで唐代として知られる中国製のシュタインツォイク(炆器)や陶磁器に完全には一致しないものの、少なくとももっとも類似しているため、東アジアからの輸入品(IX)と言える。しかし、東アジアの陶工がたまたまメソポタミアで製作したものだという可能性を、完全には否定できない(XI)。一方で、明らかに財産目録の注記であるアラビア文字の銘文に中国を表す *sin* という言葉が見られること(図187)、カリフの宮殿の倉庫から東アジア製品がまとまって出土したこと、そしてこれらの東アジア産出土品が疑いなく特別な価値ある品であり、従って特に宮殿で使われ、私人宅では例外的に稀にしか使われなかったこと、これらの事実を再度強調したい。初期の中国陶磁器に関するわれわれの知識は、今まではもっぱら墓出土品に基づいていた。もっとも良質で評価の高い最新のものは、当然のことながら墓には使われなかった。サマラから発見される種類が、同じ時代の中国の墓から今までに発見されていなくても驚くべきことではない。むしろ、当時の文化的な世界の中心であったサマラのカリフの宮廷に、(前号255頁で)周知のとおり工芸品で名高い中国から、もっとも美しい最新のやきものが届いたことは当然のように思われる。もっとも注目に値するのは、材質が磁器と認められ(IX.F; 付録II.A)、中国史料の初期の磁器に関する記述と一致する装飾を施された白磁が、ごく稀にしか現れないことである。[注:リュッケル・エムデンが記した重要な覚書(既出書47頁)を、ここで補足しておこう。それによると、唐代に Kansu 地方の T'sing Chou で、純白の浅鉢や碗が製作され、さらに貴入のある器や魚の浮文装飾の器が作られたことが「景德鎮陶録」に記されているという。]

さて、これら東アジアからの輸入品は、この地のメソポタミア陶器のさらなる発展にとくに重要であった。メソポタミア陶器の一部は、輸入品から強く影響を受けたからである。東アジア製品のほとんどの種類は、それぞれサマラ陶器が模倣している(XI)。メソポタミアの陶工による模倣品は、形、彩画、釉において多かれ少なかれ原型に近づくことに成功している。当然のことながら素地はその土地の粘土である。しかし、素地の模倣もたいへんうまく成されることがあり、いくつかの資料は数人の専門家の判断によっても、東アジアとしてよいか、土地の陶器であるか疑わしいままであった。スグラフィアト技法も東アジア起源であろう。東アジアからの輸入品のいくつかの特徴的な破片に、この技法が見られるからである(208,209,220)。同じく東アジアに起源がある斑状の流し掛け釉は、スグラフィアト技法と結び付き、サマラ時代だけでなくその後の数世紀の間、中近東の陶器のなかで重要な役割を果たした(XI.C,D; XII)。

サマラで発見された東アジア陶磁器、とくに磁器と斑状の流し掛け釉の炆器は、もっと後の時代のものであろうと高名な人々が述べているが、その推測は遺物の出土状況により否定すべきである。出土したすべての陶磁器にサマラ時代、つまり9世紀の年代が与えられるのが原則である。例外は、都市の衰退期間やその後の数世紀の間、ある特定の場所に存続した窯の製品だけである。その場所は聖廟のまわりにできた現代の小さな町のすぐ近くにある(XI.C,D)。そこが町と河にはさまれたクラであり、9世紀の遺跡上にある中世住居の薄い層が残り、含まれる廃品や破片によって後の時代であることが確認できる。本書では、文様と銘文の書体によって後の時代の陶器とすべき、流し掛け釉で劃花文装飾のある東アジア・シュタインツォイク(炆器)の模倣品を取り上げた。同じ場所で大量に発見された同様に後の時代の、いわゆるラッカ陶器については、XIIで言及したが詳細には扱っていない。その他に後の時代の破片が一度発見されたが、極めて稀な例外であって原則を崩すものではない。動物文の押印陶器(II.B)は、すでに述べたようにもともと都市であった部分では出土せず、周辺の孤立した遺跡、特に都市の東の大運河沿いのガナウアから出土する。この陶器の窯業地がカリフの居住区の外にあったのではないかと推測する理由もすでに冒頭で述べた。

最後にサマラ陶器の装飾を特徴づける工芸的な伝統について、いくつかの例をあげて再度簡単に述べよう。バルボティン技術が古代オリエントに由来するように(IX)、装飾モチーフについても形象描写装飾の中に古代オリエントのモチーフが見られる[注:60(図48)の主文様が、2世紀の印章におけるヒッタイトの「偉大なる女神」のイメージにまで最終的には遡ることを補足しておこう。60では女神の裸体は様々な衣を伴って描写され、その衣装はミケネ美術に由来し、帯文や花飾りの形で表現される。ドイツ考古学研究所報告43巻(アテネ1918年)156頁以降のヴァレンティン・ミュラーの記述を参照のこと]。178のタイル(図106)の形も、疑いなくアシュールとニネベの壁装飾として知られる古代オリエントの摘み付タイルに遡れる。ヘレニズムに由来する古代の様式は、とくに無釉陶器の装飾、月桂樹やアカンサスの葉の帯状装飾、小突起付きの把手やパルメットを伴う把手の形に見られる(II.C, III, IV)。金属器を写したラスター彩レリーフ(型押浮文)陶器(V.B)が、古代末期やビザンティンの様式を保持していることもとくに興味深い。

ササン朝美術に起源があるものとして、押印のある無釉陶器(II.B)のいくつかの装飾文様や動物文メダイオン、中央に雄鳥が表されたラスター彩タイルの環状葉文(VIII.B)、クリーム色釉陶器に青色で描かれた生命の樹モチーフ(VII. 図199)、ラスター彩の翼状パルメット文(VI.C 155)、特徴的な摘み状の短脚をもつ瓶や浅鉢(VII)の形などが挙げられるだろう。初期イスラームの室内ストゥッコ装飾と同時代的なものは、質のよい無釉陶器のいくつかの平面装飾文様(図40-42)、「偽蔓草文」とも呼ばれる種類のアラベスク蔓草文(図版XXXVI)、そしていわゆる第一スタイルの壁下方部装飾を直接的に模倣した、新しい年代のスグラフィアト文様(図167)である。

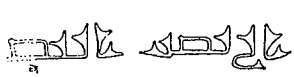


図173 アハミン出土

Alif	ا
Bā	ب
Djīm	ج
Hā & Khā	ح
Dāl & Dhāl	د
q. Kāf	ك
Rā & Zāi	ر
Sīn, Shīn	س
Ṣād	ص
Dād	ذ
'Ain	ع
Fā & Gāf	ف
Kāf	ك
Lām	ل
Lām-Alif	لا
Mīm	م
Nūn	ن
Hā	ه
Wāw	و
Yā	ي

図174
ケーフィク体文字表



図175
エジプト出土

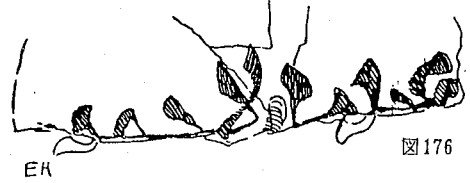


図176

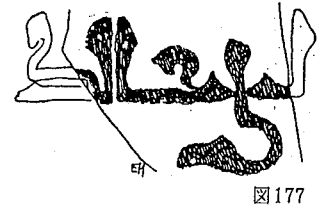


図177

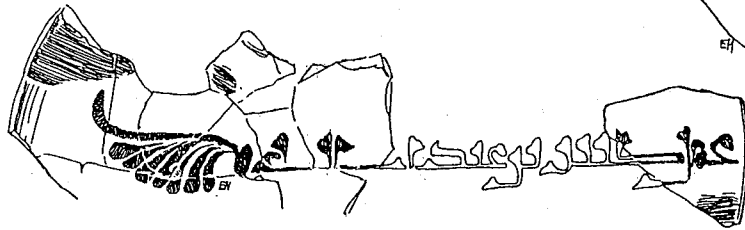


図178



図179

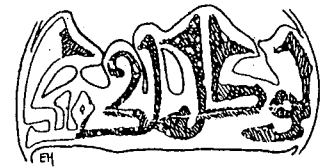


図180

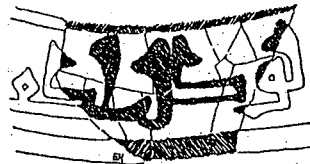


図181
エジプト出土

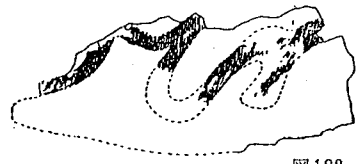


図182



図183

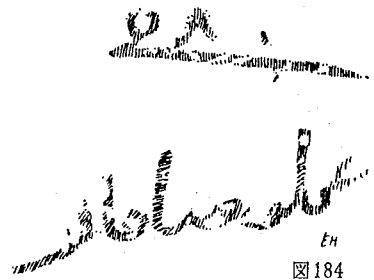


図184

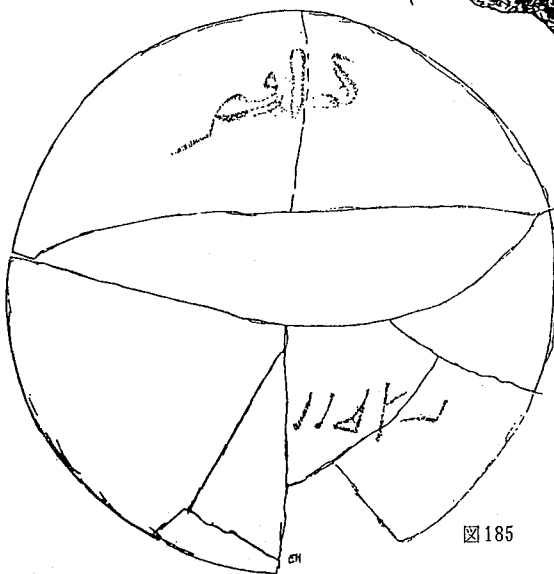


図185

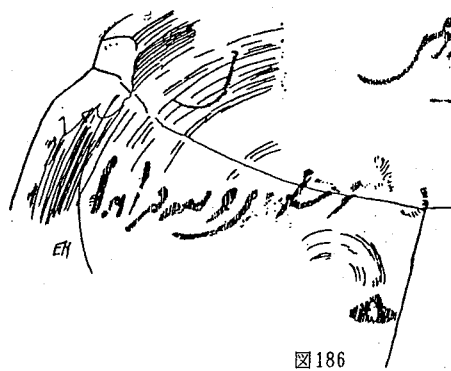


図186

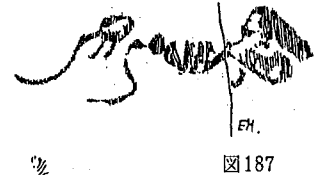


図187

Figure 1 銘文を伴う破片

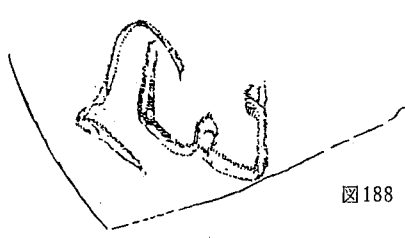


図188

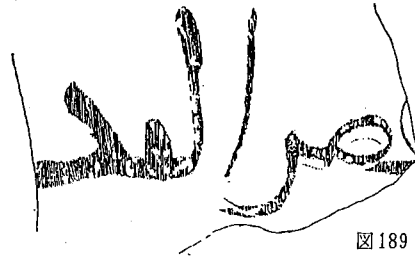


図189

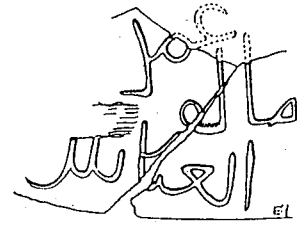


図190

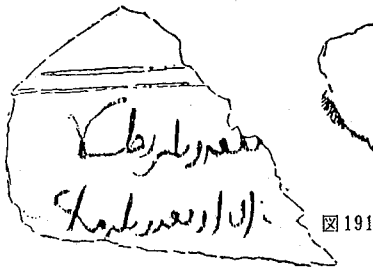


図191



図192

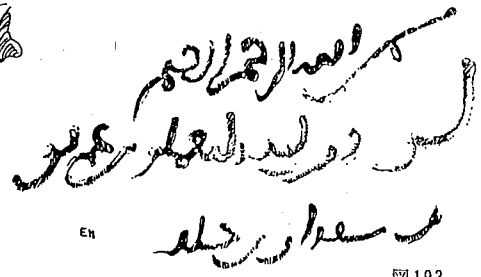


図193

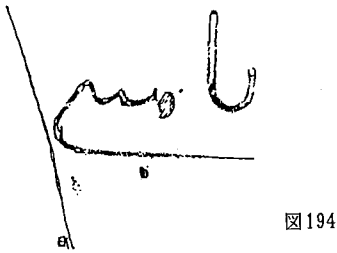


図194

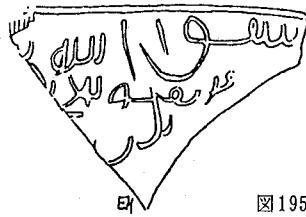


図195

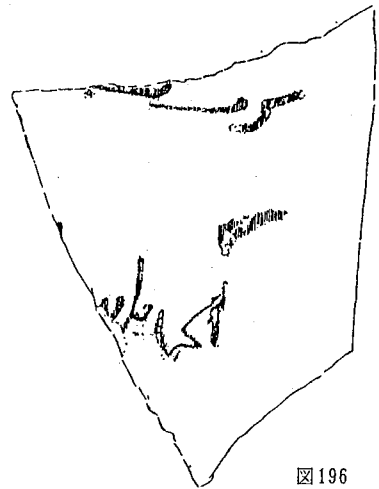


図196

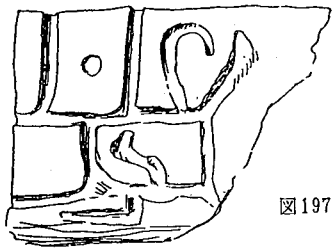


図197

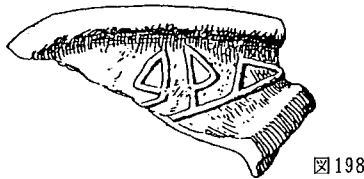


図198

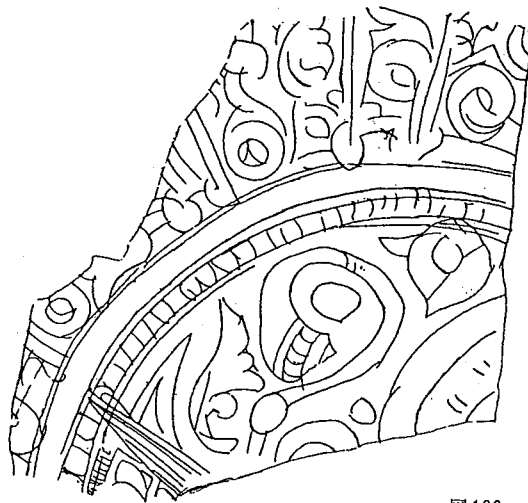


図199

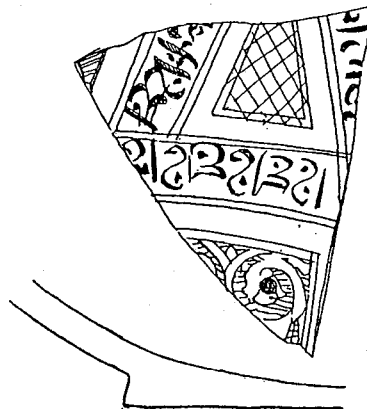


図200



図201



図202

Figure 2 銘文を伴う破片